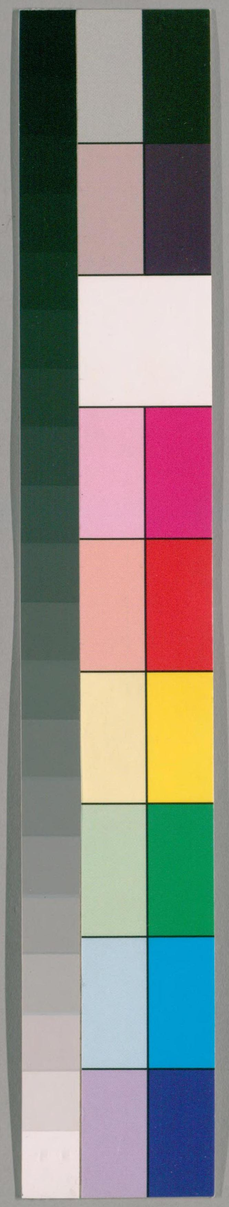
857
118



国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

857-118

源氏物語抄巻第廿

目録

さうまか

花ちか里

をさ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

賢木　此詞及奥入巻名

源氏廿三才九月より廿四歳乃夏迄の事見ゆ
斎宮乃御くだり　斎宮群行九月十六日禊祭前ノ事也河
世人を　もてなすを文選ニ此肉なもなり
御とふらひしと　御息所乃霊の気なる也
ひさみち　無後　決定　又一向と云む也
おやうひて　此事例ありといへども時代まとうろ
して書かれたるを無例とや　圓融院御時村上乃
御女　規子斎宮にて下給時母徽子女王　重明親王ノ女
女御のひて下給しや見ゆ　見河海　此時はじめたる
と例はしと云うりや　婦　天延三年ニ斎宮ニ下り給ふ

寛弘源氏物語作 卅年以後也 私 天延の後九度改
元也 卅年して寛弘也
人をしのぶなし 双紙をしはりて書たれなり
人ハ源氏を御息所也 霊気の事する所へし
もとの殿より 六条京極之也御息所をわたらる給ふ事
もある所也
まうで給へき 證文なり
院のうへ 此巻 崩(ホウ)じ給へる
九月七日 ならば七日は御西白時分成べし 群行(グンギヤウ)十六日也
いでやさきを 我をとのゐと 不寝門也
松風をあく 拾遺 琴の音に峯の松風かよふらしいづれの
とうりしつへ 勅勘
殊文は女御殿まうで乃名なれども心通せし 嘩
うれあさくを 管絃(クワンゲン)の事也
こきん 古楽府(トモ)也
志乃ひ給つれと 思ひなりし又用意ある所なり
二葉もと大のきみ 延喜式大嘗(ジヤウヱ)会の壇(ダン)を紫とぞいふと
云く殊文殿宮女も是に可准(ジユンス) 花嘩 大裏(リ)中も火着(じやく)なきを
も木と用不織成氏のうまあまくやりてみ給ふむるなり
くろ木の鳥居 皮付る木也 仁徳天皇より始云々
かんつのさ かうくとそう 神く敷也
ひたきや 火焼小子(ひたきのこ) 二人あり

山城國葛野郡　秦氏童女とよめり延喜式にみえたり
姫大　神殿をとちらしむる所也　春宮にもおなし播なと
をこしむる所也
小のたい　女れある所と云内との心ならしや神さす所に
まほお挍そいのしきそなるへし
あそひや　そのことゝれ首尾なり
かうやう乃　源詞也
かうもあの外　神絃乃詞也　あ手の外なるへし
あくの人目　神日なり
すのおほさん　世次なり
出ゆんか　かな挍への出来なるへし
こなうそ　源詞　馬ぶけはしらかそなり
月比れ　姫もいかゝと也源しらの中にも絶給まひて
こやまをゆきも　登れ事なと成へしうねくしも
まつきうるあくろなり
あけはぬ文と　榊の文かよそへるてん乃給へ也
子ちやゆる神のきさ山の榊葉を付る為のくをもつりしさゑま
そり　藤花院殿　君八度をとけとらりしぬ榊葉を
神のみまへにしけり合にけり
りのきもあるを　ちはやふる神乃斎垣もこえぬへし
今そ我身れ惜しけくもなし　の心を深へし
神のくみゑ方　御息所の方ことのし殊勝なる

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

為須ゞふへ尤之所しもすたれ物をとなり
いつれまての色そそ　思ひたつ色てと云心なりや
般若ハ三輪山の御事しらん祢らひきまゐを松たてる門
三輪の山いつれまつみん年へともなる人もあらしと
おもへとも　伊勢
ととめ子の事　来迎女　飛事すなはちの童女也
揶をの衣とかくいゝしとと見へそれを八十氏人も雲井せ
ますり　此事まくらめり
大かゝれ前りひ　内へいれをいらてあるき
ひきてて　引のみすてなり
人色おたちひさ夜　清息和もなり
さまおりて　是乃事なしを色し
おほしとまり　源詞
月色へぬ　前詞あり　夕月夜とあり
あくらおりひ　清息のむ中されをうと対面まてそむ
みされ清すなり
殿上丸まのきんさち　私前琴やくみそしりへ私前処在
まゐひやらん　何やのやるれをと奴也
しと清くみ清くゐ出　三秋来眈之候　各秘清明之天別
絃信三之情忠節切三之恨　遭逢斬断
おて曙の家を絶出ゐる様と也
あり清ゑの事　源氏事　めの此乃やうる白事をたくひ

かなしと也

暁れ別のつましのつゆ白露のれそくとしさ別せまし　や　大極(ヨリ)殿時仙勢若(テクチリ)錦中勝(ニ)粉(ヲ)芒(スハ)秋天

中くうとを　双紙　透逸(シユウイツ)も出来侍らすことにてこそ

さけとゝりたれと也　花も盛

大ろとの前　御息所の別をしのひかねまうしや　おほかたれしきを

うへまん不敢して　室皆(クワカイ)のいひ人れを此物云(ト)に

くやしきと　源氏

あやまちを　不審もなり

又うちの色し　此下にあるまなる色し

おとこ君のう　おほしなやむましまて双方

ほとちかく　御下り日限(カキリ)乃也

秋空を　不定なり侍るとうれしく思召也

りくさも　人ともせくむ気

何事も人まゐりとは　人乃さしへや　変えとよしかむ

へ文えりや人まいらられてはり一大事成へし

十六日　酉時　桂(カツラ)川御度のはらへ也　荒秦(アラヒノイチ)に委し

長奉送使　御前(コセン)勅使(チヨクシ)とは御道まて供奉(クブ)也　長奉送(チヤウブソウ)使

是伊勢まて供奉すといふ　花多て委し　延喜式九ヶ内

親王院別当(リンキヤウアラカミ)　定監(ニ)(ケンモン)送使参議(ニ)一人或以中納言　下略

遠いれ　御息所はいとこへなり

のけまくも　かしこ　秋空へ也のきてゆさんは恐(ヲソレ)多

れともとろしや

中にはゐて　粟忌部祖天日鷲神造木綿者

旧事本紀　天原とところかし鳴神も思ふ中

をさくるものかは

やほあひの方　日本の趣也　源氏方

地祇と國つかみと云　山祇と書てや山つかみと讀り

海中地祇とかくは云也　天照太神に對してよめる也

海底と源氏の中をこともれとなり

伊弉冊尊産生大八洲ニ謂小嶋合十四ケ嶋其處ニ小嶋

淡路嶋為胞而成者也　旧事本紀

おりひめふるみ　さてもくあらぬ中と云詞なり

定の所とも　定の城をさるへ

女別当　斎宮女別当也今此世にも院宮内白家なとにも別

当局とてあり

くふつりとは　地祇と書りとはとこりしの源氏乃心也と

ことくかはへさきさんと源氏の事なく

御の色りれくまくし也　源氏かれとなしきとかり

飛島なり妻と可讀と思ひ見

迷いまたの色る　あはましきまりを源氏ひうつ給ふと

世中不定　源一代一度のことも也り　末うしろ見給

し前氏なりや

源氏所御あしに　秋王幼稚しますの時も源乳母いふとき

なりて御輿なり　業也今秋文也十四才の成はへしとも母源

息所かひ給へるも同輿まゐる内へ入りて給へる幼主の給
率の時乃例也　花の宴に　荘厳とて鳳輦にてもなくしき
て一かしれたりと金をとりたるを御輿乃ものにかね
ゆかしき主上の御禊又諸卿へ御輦乃時めさるべく成べし
駐驆　御車　同輿　不審と仕給ふとなり
かくれとく　御息所は又大臣　十六にして入内十七まで
御父をとまさしあり　そこをちかまて　東坊にをとられ給ひみそ
かくまく又九まをとかん給ふとまや　玄宗妃　戚姫　選入
入時十六今六十　楽府　上陽人　は　白
かれのことあ　此の旅言の日たまつてかや　御息所の中しとや
十六にて入内す年源八八才なるべし

東坊を　朱雀院の立坊よりまへの東宮也　保明太子
小一条院なとの例　無品位なとは常のことなる
御むうらみてかのまれのくし　大極殿高御座の東北
御座まて宮に入さる擲をとらせ給て秋主の額にさし
京のうちへかもむきあはせと給ふありう　荒る事あ
儀式さなくく也　勢田橋の宮まて見しとや帝へ入給ふと云
此一代一度かまほ京為れもむきさ給ふかこと
八省　大極殿をは八省と云八省は中院なりゆへあるも
此事を八省は東給ふたて給ふるや　朱雀門乃内
一町まあり　中務　式部　民部　大蔵兵部　治部八
首也比前の中院也　いくし車　供奉前なとの出

車宿 牛可宿也 くるまより出て申刻よ入内なり

洞院乃わかち 就王 出昭訓門至八首東從南行至

郁芳路東行至萬秋門南行即出東陽門経二条大路東行

至京極云々 洞院東とも西ともいふ也

ゆうもてくる 源也 ゆれしやうなり

まくの河原 擣田の松家ちかきなり 鋭康川八十瀬

月そ雑色入り 換あえみこまかん事もなくに

ゆれもとも文ゆかしくとも関をあえたくはうすくこそわ

すれたまへんとなり

気色ばみたる 法然有色也 きぬさしへ入り

わまつてお引ひきされさく法あるとなり

所いくらう わかしく掲芳乃京気とたのふへし

りりとこそ有 源氏いくと面白うことなり

たひうを 双地法恩所もさうなくて也

まつりあたりん 政をんうれへとなり

わきらの意を 大臣の法ありなり

何とあなくうれしと 東宮幼稚にしませし法ひとありれ也

これ又 東宮乃ありなり

わ海ささゆえ あれてん 皇大后宮なり

中宮のかく 入道以後も中宮たまへし給ありけり 太后

不来乃ありり 崩法なり

よの法世のわすりうりて後をさりて世の政し給ふ

事嵯峨天皇の例先彼この世を連綿也　花宴
おほきおとゝ　太大臣　源氏太政大臣　たゞとゝまる例
うへのまへ　花の姿也
きうり　急
けうし　あうやう楽このひなり
春の　鶯囀なり
去年　今年　去年崩上まて
法かくし　嵯峨上又帝ホに　御出家頼成也
様もく　皆ちりくゝり院中を退出なり
七十をとの女日　四十九日　女は御息所絶えもなし
宮の三条の宮に藏蔵乃まゝ也　兵部卿の宮のかく名の覧激し
うけひろこゑ　兵部卿宮おとゝと院か法して也　法や拾へ
あんとよめる府篠勝大やうりて源氏の人に
なんほうりの　うれ花面白りし弥となり
ゆしわらふそ　中宮　池ハ水鏡なりしれ鏡なりて
新みしもうりまうなれしも
箇蔵　古院とみてれ古也　・　河内本
ものくさう　世心なりけるを草下る御をし
面座のおりひ乃まゝなれをおとなしりうぬとるまて
されとゆめるうて恵なるまや　あれおもまきれく
花れ冬さやうふも家の法親乃おもおゆるうれ
禄事乃啊れうとなり

五　九

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』　請求記号 857-118
ガラス使用

王命婦　王氏也おくり雑を語りしぬ間をも出し あく雑を
語られハ必源氏なるべし
まつりごち　記若筆也　ことうも白
古文を　三条定なるべし
さしたる年月　此院をり御座ましとなり
やしき色りめれと　源氏三十才なるべし
いつれめりしき　天下諒闇也
みちとのかくさ　二條院
むまくる海　琵琶引 玄門前零落鞍馬稀なり
との井稲乃西くる　三ケ夫るなるべし
みくしきとの　御匣殿　朧月夜也
院乃御おりひまく　まへの内侍たのこしまや語ともなし
右をはとうりに　大后也　梅壷とはうしや志給へるべし
登花殿　弘徽殿より奥元むきをれうちまれくしきを
よ花也　元お　奎ありし奥かうさしうや　朧月夜登
花殿よれをせしの弘徽殿より移給へるべし
なりひのかかう　源氏ノ密通也
こ姫君を　葵上と朱雀院よりはにしさえし故源氏よ
定給ひし事なり
れとしの　たとれとの江中なるべし
そをくしを　文選とそむつえるなりうむきくなり
あくろの　河お

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

かきりある法にまかせての　源氏を院乃思召し时此事
とりよ　嘆
むかひり　喪服　兵部卿の女姫君(ムスメムスメ)上にをとらせしとや
紫上乃ためにはまゝ母なる故也
むかし物かたりにも　大かたの事いへり　又伊勢物かたりに
喪服をきるという事あり　嘆
秘院を(?)いかくして　葵巻に后腹(キサイバラ)の女三宮の斎ひしと
ありし院の事なり
一勘　槿(アサガホ)斎院を桐壺帝(ノミカド)乃御めいにまいらせ　軽服(キヤウブク)七々日の
服三日乃服(イトコ)まて雅(?)もなく日うとさもめん　云々
但桐壺乃御門崩御(ホウギヨ)なれはさる事也

そんし(?)　延喜斎院式云　恭子内親王依世源簡(?)之(?)女王
卜定(ボクヂヤウ)ニ　今案此摘讓のたかひ延喜以往の事
をも例(レイ)ニ引て延喜以後よりのを今乃事とも書なし
ゆり　孫王(ソンワウ)は斎院に立給ふを穆(ボク)子女王(ミナコ)　以往
の例(レイ)なし故ありけるにや(?)と云々　先
中ね　槿(アサガホ)の女御なる也
むしに(?)　桐のくれなひて後なり
みのりと(?)院の　史記ニ曰　孝恵為人仁弱(ニンジヤク)なり
大絃急(キウナルハ)小絃不堪(タヘ)　と云ごとくに御心まゝとまや
朱雀　天皇は御門りたとへなれなり
つよきこれ(?)なとしまさぬにしたる計までも不許事也

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118　　ガラス使用

くとなり
なげきわびしき　此用と人のあつかふなやみぐさとそ人
にも　嗔　見るに世を驚（ヅヲ）の胸（ムネ）のあくことなしあのまく
閨（ネヤ）乃中ちくと身をと壷せともやとなり
御ありさ様まで　句
きよきやうでん　髭（ヒゲ）黒（クロ）乃弟也　此の小ぬ　異本多
朱雀院　女御今上此御母なるべし
つれづれ人　弘徽殿乃事也　つれづれにうらみたり
ことなれとすや　恋（コイ）ちつそこつたれともめくよ
とおりひたさぬる
内つり海りつと　弘徽殿入内乃事なるし
いとれそうしきれ　古院源氏の密通（ミツツウ）をば一世にまたふし
めはれさりし事也
御いのちをば人　伊勢物語にしるはかるんやめ給へと
あり　浮舟（辛子）の巻にもあり
まみのへ気やうもなく　双也　源乃ば詞と見
似られし事も見
明らくまけ遣とせ給す　源氏なむうせさるやうろう
かき遣たるゆへるや
ぬ臣ごめに　荒れとれむなるゑし
在南あがりま　気と云事もあつま同
大夫（タイフ）　中宮乃大夫なり

あまりぬ　源氏落ちよ夜の心なきをぬすみし
宮もさすかく　兵部卿宮也
程くるしうよう　夜の詞なり
世やはかなめらん　わかさるまし涙乃を流く成りきせや
はかなめらん時や来めらん　拾下集
年比をまし　久対面（タイメン）なりましとなり
をまし袖おほひ乃　紫上とみて思ひなくさめんとするま
程のまゝり　常より思ひしこまる所りや
ゆもうかいみしとすゝみかし　乗文なとの始まんれるま
なるへし
あらまほし　前にも加やうの事をましうとも今我
始（ハシメ）の様となり
もうひ　無理にもいのくとするま
明そのま夜はくまして　王命婦と弁となり
世中にあつまと　源詞也
たゝ事の方　源やかてう世ゆまんの詞をもいてかく
流人　あふかほれあすいいく世をもんやうそう
世すんとなり
浮かぶ身　かゝる世たるもま此罷となりんとするま
三熊野の浦のつまはくまはくさらまようつめかた
しるまなれ
なりき世の方　恨（ウラミ）もと夜つれよろおしてても源の唯ことを成

理まそと也んとそ孫の力をさしてなるへし
いかくそれまても　何故めんかくみと也
世にあれハ其この色さまさまに三者ゆく岩乃かきを踏なり
しさん　此事の心にて書なり
此女に　芸上也
文も　中々文なり　太后のあさましきことを中々文
いかり戚夫人ひしとうね三年人也
を見ふたくれ見あんめ　みかんめきみかめ乃ゑうかり
と云也　戚夫人ハ漢高祖の妾趙王如意の母也
恵帝太子にてましましを立の君とせしかとも漢祖の
われ子なりましまして高祖を崩し給ぬ恵帝位とはさ
給て後呂太后のむくひきんやして戚夫人ハ眼をぬ
きて耳盃とかはてかもや乃肉をそこみてをのれ
事乃あつりかそみあん光乃色かりあしけと
わて故給ふ太后ハ給心を恐給ふ詞也　花
史記曰　呂后乃戚夫人子趙王因戚夫人断手足去眼
煇耳飲瘖薬使居厠中命曰人彘
おものつまさん　屁かり戚給ふんれ心にま
文そいみしう　年文　云ぞなり
おもりしみそれて　句
御らんきそくしりん　故壺詞也
我か事やうつや　老さる女のあ所をとられのやうみ給てと

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

東宮おはしてなり
よゐの僧　禁中より候して祈祷する僧なり
ゆくすゑまで
めそて　めうりなして見
玉のきず　毛詩　白圭玷尚可磨斯言之玷ハ不可愈上りし恵
事ハ給出き不磨となり
雲林ゐん　淳和の離宮之院　小野篁　紫式アノ墓あり
こきく文を雨　文徳乃御兄弟也
秋のわくことにすめれ　秋乃野より分海め給たてる
女房名あなのしかまし花も一とき
まさ人――とそ　天乃戸放て明てこの月みまさる人

たもつ事しりまゐりける
うく　花皿也　時花とて其時々の花葉をたまはり
なし　清濁也
念仏衆生　光明遍照十方世界
りはかまねへし　遁世者とまで
きこゆるへ　法文也
みちのくにかみ　檀紙　白厚也
浅茅生乃宿　源氏此たしむすれと云むなり
関守よそてよめり　世宗也
上東門院へ　一条院御不例此時送給ひし歌の下句の
かゝるや　御返下句　君をとゞむるとそくれしき

風ふけたる夜　あまりかるらかなる御ありさまを世におもひし
てまへのこゝろ末の詞なりとそ
中ね宣　斎院の女房衆なり
かけまくも宣　取わきてかゝるにも必いひいたされんと書
老ろ乃むすめや槿なかりし頃もあはれなりし　今も斎院に
てりひも見えとなり
むかしを今に　いかしへの斎院乃をとまれくかりし
嵩をいまふかもかしもかれ
とりの色さまん　とりの色を摘りものかや
むハ斎院に立給ふぬきれハさわやかにも聞し摘をと也
中ね海きれく　中ねはあるさまゆかんとて書文給なる
つしむとしめて書りり　れまんれを　斎院の世かや
そのゝこと也言　源氏の君何となくうきをて也むかしに侍
ゆかとところめ給へる　源氏の君をさかしくゆへそとるまし
以藤蘿葛為半纈と云と
ちりの世　ちりの世にも夜はりり心ゆるし
引かへり重なちりの世にかへりんかくれまさりしきとなり
あさかほ　離をもたきそてるまし
れそうしや　朽るの腰也
あふの摘と　秋文　斎院にむをほくまとれかしめたゝ也
一枝の摘とそうや
わきぶう　源氏君をなく右にしめたし或アに文も槿

をゆるし給らんをのぞとあるは
院も　故院也
あいなれと　双紙判也
六十巻　天台玄義釈籤あはせてなれとも是六十巻なり
定家卿自筆本には今お経さく文字ニ五経なと云こと
人ひとは　紫上なり
ものゝふるいへ　ものをめる人仕をまなへし
紫え人　鈍古人敷ありたそのよりさる古人あるは
くろきは車　西宮掛　重服のひは黒漆車に
今案諒闇なれは源氏もおなし乃やつれとなり
世中いかゝあらん　前代ハ成て源氏乃御子ありひ給
ものあるをおもしろき也　呼
源氏はいかさまやみゆらんとうちや
冬のそれ　花あへりまし詞なる
おほけなきさも　中宮とおなしなとおほしめして
御念をあつくもちくさきは
今めかしくそせんる　いとせさひのきる　源文言也
春宮へ中宮ゆかせ給ひけり事めいらしさと書給ふを
ちそんぬ　東宮ありおもしきまゐりおとなり
宮乃あひさ　中宮とも東宮も寺務ありとし也さ河ひを
なかつきうくとこうひ給ひてめんとてこゐるとかや
日うす給ひなしきやそてうんる　日おもと被て出ん

ひさしくなりぬるとなり
にしき　みる人もなくてちりぬる奥山乃紅葉はよるの
錦なりけり
かゝる　おりひやうとふかう物し給人乃ゆかしかるべう
源氏乃御事とのたまふ也　ゆくりなくを　不意
おりひやうともあまたと云心也　ゆくりなうとも用意
宮乃御事なれハ　まへ大将をかへり中宮も御心也
るすなとあはれなり
御はてゝ給ふ　三条へ御参の日　中宮へさぶらはせ給へり
人あやしき御座所ともをとりめんと思なてるを
先帝乃　先帝の御門御まへなり
世をしのはせ給する　源氏の方へ御むかひを給事とも
門見給不時をあらるゝ
中宮のあつかひ　遊席半退出いのしよそて給ふ也
春宮をとし今内の御子又　朱雀御子まさせ給へと御遺言ある
ことなり　朱の詞
とそうる　年も程色勅定
大らき　源の詞
さいけいてん　朱雀の女御也
白虹日をつらぬけり太子をちたり
漢書曰荊軻慕燕丹之義欲刺秦王其精誠上感於天乃白
虹貫日太子畏之　史記ニもあり始皇をさしころし

する時白眼に赤筋(アカスヂ)のあるを云義也　白虹日を貫(ツラヌク)とも
読けりと張良を遣はしけるとし荊軻といはれける
と云心也今はするは源氏の末をのゝふるまひとするを
疑惑のらんとすや燕丹か太子をたとへ源を荊軻に
して也　漢書に云て太子白虹れさししありて燕丹取
立る事　疑惑を添るとする心なり
稚き人は　法門乃稚き人也　東宮乃法詞
月は有やの　上詞なり　如日此月やうくとあるを也
九重に　中宮法言　雲(ヰ)やゐるとよめるは主上源氏にとく
よろしく思人の心中もたとへるをさまさなりてゝ云明也
月影の　為る中宮の法行をうきてなり

下には源乃思を凛(ヨミ)給へとまへたて給ふ事とある所へし
霞も　山桜(サクラ)見んに行道へ左刻まて霞も人此心ある所
例を　法夕まとひも法退出(タイシュツ)退起(ユツノイテ)おもしまする事
かれより　朧月よりなり
木枯の　木枯(コガラシ)に源氏をよせてなり
但私　木枯は言の葉此ちりくるのを待し間に後へ
ゝろとも心ありて可然処待し男女とあらかじめしに如此
みて為也　東詞　雲のしさせてもの儀なり視叶(ヨカラフ)也
筆なと心しとに　朧月夜に泣勝(ニエセキ)たれ故也
雲のしさせても　源氏詞　迷衆法のさのとの哥也しかこ
見そてとある

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

身のうへのすたれぬる身のこゝちうくおもひ出てまさなく
またいり給ふにきこゆれ除目なとまてに除さると勝
の事ありかしこそなり
あひみすて御 なへての御身とみるらんやのなみたに
てある揃をとるまて
むかのよふなるを 元良親王 家集 人こふるむきを
みのよへともやみも涙をもにこかれて
中宮我むかれも同心のとあるむそそのむりそなと
我もものよそくれのなる事我もおもひきんとや 嘆
伴のなり院殿 ここ御我まくと先侍と此儀可然く
し後されなし 双紙 此法講上に出けるりや

御八講のいそき 中宮乃うしろうちもの色ゆふつかふまつらり
みあた 國忌一天下服也 國忌山陵と云て一ケ國を定
て寺建(コンリウ)末代まてのことすたれ廃陵(ハイレウ)まゐりや
まゐり安し 中宮へ也
おほしめす 源氏あふみ 宮をもくせ給ふまて
なにしろ御 中宮 おめくらも雪の心なり
すらかなる 御めなる詞なりや為乃すはさのやうまて
よろしきことなとを
そのを 中宮乃事くちて源をとこゝろ給ふまて
十二月十五日 十二月中宮御八講定る事とこゝ
式部卿

ちを　鉄貫　貫（ヌ）しあみて経（キヤウ）をよむめり
もの面ゐ瑣をくしてぬりとかしてくさのをく付たる
なり経にし無限（スキラノ）書籍（シヨジヤク）と納物（シフナル）なりや
花法くさ
ちんたい　中宮の又従乃日を母后なり
又巻　こくもんとよむへし　提婆品
六位薪（タキヽ）と水と汲（ヲキ）てもしるあり　法花経をとるのえ
し事も薪こり菜摘み汲けりゑてう悪し
採摘（オケ）しやう　たるり也　修行道あり
つ縁なり　紀者（キシヤ）の詞也
みこハなりその　中宮法出家の宣旨（イセム）をいて京（キヽ）帰ふて発（オコキ）る
入たまへり
法をとちの　中宮の法をとちたまふ
いみしくめて　むみされぬへくなと山割殊勝（シユシヨウ）なとく
ちかきかたなるを　めされするきく
こゝろ香　中宮乃焼（タキ）給ふすへあうすはるゝ乃くるゝ侍
包し　黒方（クロ）を　空焼（ソラタキ）也
月のまむ　源氏宮　皇子　此鏡（ス）中に　忉利天上家との
望（ムミ）也　名告あのせのやことを東宮なるへし　東宮乃事
とおほしめもことを今への御ひとかくてきまうせ
源のうら山しきとや　疎説（セツ）せるのしきの源とを後
せもよろ宮の御ことも思ちものひなしとある也

大かくの　中宮御方　幽玄也　下向衰なるへし
百敷の内のこつねにおもひて雲の八重たつ山をすまゐ
し　山にすみてよきことも子にとゝまるも後也
うつふところへ　引弄し不覚也
ゆきこへし　双紙
殿まくも　二条院
大やけの御　中宮より給ひて東宮の御うしろ見のこと
右院の折めしたるに中宮をも所挙追ありしんと也
ゆかしくしや　双
おりひまもめでて　源氏密通に見えて　双紙なり
やむものかたき　源女口伝
ひき寄　随身　綵装まんな　内と外節会也
仁寿殿よりくれてまいくる也　題をたまはりて詩を作
て清書をいたして講するも也　廿一二三日の間ニ子日よ
あそびを用ゆ　一二献の後親王公卿より君達の題を
給ふ　保元より後絶たり　後涼殿と云と
むかしのみちし　源氏好文なり
ものゝうち　三条宮
ゆきと馬はしり　中宮へ行り
白馬節会　七日　馬を陽獣也　青ハ春の色也　委注ニ
むかしの　二条のひとく也　三条よりむかしのひとよりより
一注大殿ともにあり

ちひと　十人一人当るなり
みをのけし　みをれをりなり
の梅　岸容待臘将舒柳山意衝寒欲放梅　杜甫
むへも心　あふ事松の浦嶋きふろへろむへ心あるあ人
きすとなり
なかめの方　源
まし世乃方　是を浦嶋大臣仙ゆより後望るゝよし
ゆりかゝきしくるゝ心也　文中み　指したるあらぬ也とも
ぬて可笑也　松の浦嶋をうきての御返事　またよ源也
源氏の御前にや
きれはかくれ栖てそ　源一身乃御世とちの御殿ひしの
今を世乃あ指そも法かゝおとるを
むかしの色ろ　老たれ心なる色よ
つのさめし　尭陰　宣れるするれを典に書り
春乃をあかためし　たすを常へるとを中文より出給
て疑を天下なり
たりかゝ　文の法給　を理とをまかすゝして加階すへ
き年労と云　三文乃年爵とゆくり院れ法給同之
れふ　法對なと　不可役　入道し給へと執のる乃文
とやしへるむなり
あのとめく　源乃うしの人也
ちゝれ色う　表三度まで奉事しや　清懐ひを致仕表

其後同八月十三日円融院受禅時更ニ摂政トなりたまふ
うへの大臣も此奏にて致仕してみえたまふしに冷泉
院受禅の時摂政をは致仕と云を七十にて致て出仕する
ときにはよりて此君用する車を先祖の廟にのるなり
あつかふの輦車のよそひ其人を官職と辞といふとも於
政事をとゝめ人にいかつ机杖と云　脇息の事也
漢和の例　河海抄
かゝるさひやし無てやなり
一条　二条太臣　一條也
右子也とも　左大臣　息子なる将てし
これたかのかつのさゝめし　三位中将なる
其秋乃みとの川きゃう　源氏の[illegible]
禁中乃其宴さる事なり
ゐんふたき　掩韵　古集の韻字を隠くして何の文字と
推して勝負する也　上古掩韵為宴不好連句と云ふ
人々あそひし　讒言也
みとの　文此殿也
あそひとり　大きうのれあまたを数とりて番なり
この御を後あしぶとのあそひなるを
宰相の　三位中将の官也
はれたりとわたしやうひんと　書きんあるなり
うさひ物の時をむすひあそひたる　[illegible]院殿

甕頭竹葉經春熟階底薔薇入夏開　楽天
我ハあさうひをこそ花見るをもてなす酒とのみ
思ふなるなり
中将の子乃　紅梅　右大臣也
たかさこを　催馬楽也　高砂ハさいさこの高砂の
をのへにたてる白玉　玉椿　玉柳　それもかとさん
ましもましもかと　けさ咲たる初花にあはましを
まし猶とさゆり花のさゆりはげなりとさゆり葉を入た
る所也　さやうひんと云うたふ時花のそ秋ゝうたひや
古今猶なりわまハけさとある所をとりし乃りとよむ
合てみるも　我ひ新注ある也
それもかと哥　そ道のとも　我ミけさうひつそをみて
よ見る也　源を花にたとへてよめるなり
時ならて哥　源るゝ王の身をと花ゝりはしをれやうにてまや
あくとなり
ゆうと紀　三中酒を飲ませ斗のゝきゝ弥く評也
松風のしんめうし　双比なり
愛之のさみうく　覚だて志く就を通しる也
書記さる猶不實瑾瑤ものう　たう哉く八うこぬく
也気　呼花　海樣のしなり　いさめたる哉くとしうた
ゆらけさる可強気　意說いかく
わの酒むら面も　面白悦なりける也し

文王乃子武王にわたりたまうと

成王乃なにとかや　双紙　説く相違

文王—武王—成王　文王ノ孫也

周公旦　摂政初ㇾ　成王の時乃摂政なり

桐壺帝—朱雀院—冷泉

源氏君　冷泉摂政なりへき天下をしくなり

双紙なとも　桐壺　朱雀　冷泉　は於子かなり

名云文王　武王　成王と云ましむのを常免　意を冷

泉を源氏密ニノ源子也　それを嘗或ア何とか座と書

ちる之荒島ノ浦ニ説う誤それはかりや文むをせなりらんに

てうしやのしよき

史記魯世家曰於是卒相成王而使其子伯禽周公之子也

代就封於魯周公戒伯禽曰我文王之子武王之弟成王之

叔父我於天下亦不賤矣然我一沐三捉髪一飯三吐哺起

以待士猶恐失天下之賢人子之魯慎無以国驕人

兵アりとも仲いも　呉本　並兵部卿也

定りそ　西宮へなり

殿の　二条大臣　公任　定国　西宮方りしや

中ね　大臣法息也

うつろふ　香早なり

あさつゆきさを　ゆふ湊付むまやさとあさくしく文むん

入そてくも　立なりしるる

うきニあひ　源氏帯る所也し夏雲（ハナコン）比只なり
我もるん時　勝月も今見付給へつま
もしうのこと　弘徽殿へ也　悪后方比事とりや
みてすまし　所手や
山かしをむゆる所れて　油（ユ）断（ダン）家によ当与（ジ）あり給ふとあるを
人りろう　源世上にもそまされもなり
故院　様なる也し
あのかこれ　朱雀乃東宮にて御座ありし時のことなり
たゞうかましのまし　枝葉乃事也
あやしとや　悪しき事もとけ当流にまで源氏に悦（ダラリ）理
と付さるゝと腰（タキ）まで給なり

それがいたのう　内侍のかみを思ひ出にりて思ひしとや
さばかり孫ニ当するし人比見る所もあり
世の人乃何のくおりひしるなり
志ねく　月の山のへうこふなひき給ふりしをハりん
比表の山を右みく給ふるまし
大や書乃所のことに　菅家を所外祖（ウゲイソ）西文左大臣を讒（ムコ）為
平親王を位につけんとて所門を傾（カタムケ）やしと讒（ザン）じて左（サ）
遷（セン）をされ給ひしことによりて也されは　所
すくもくしう
所きうに　我とくの山割なり
あまるて　おぼしきにさしき事をおもての事なるへし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

めやすかる心同

ろうろうしく　あさやかにてうるはしきなどとする也

同殿に后も御座あれはとかいのしろみと御腹立もすや

ひつりてに　次广なとのことのさへらぬくたらりとや

花散里

巻名は哥によりて号せ　源氏廿五才夏五月の事なり

榊(サカキノ)巻の人なとへもいふる義也　賢木(サカキ)の巻の六月やうの里角

その事あるなりや　夕立の比ときこゆ

大としの世に治りて行人まつりしかう

白虹(ハツコウ)なとのいへる　又ならひなき行人なり

れいけいてん　桐壺帝(キリツボノミカド)女御也　花散里(ハナチル)の事いふなれ

めかりや　花ち散里乃姉(アネ)なるへし

御おとうとの三君　花散里の事也　麗景殿(レイケイデンノ)乃妹(イモウト)成へし

わさとも　見たまし事ならぬ人までも思出給ふ

時なりや

五　二十九

くさはひ　雑也のすと云心の
さまやのなる　垂字せまる心のかゝわしきを女也なり
あつまにしろて　古来不審なり　此抽経ハ巻々に
筆力をとへんするゆへいふも此也楽(カク)家中も不忘といへり
まくるあいさとをしりへてと云心なるへし
よくあれあか海をそいさん哉也のこゑの色さるらりや
秘説(ヒセツ)云々
かいて　車はまなり
まつりの比　賀茂祭(マツリ)を後のつゝき葵と桂となり
よい一め　此家雅楽也もなし源氏の通路に不成なる也し
筆者強次に也ひよかれり　花散里へ乃名をそりしかし余(ヨ)

懈(せリ)なり
もよほしきあそ　ものゝ色さへせて面白也私云出手の色
波と云心ある故也
とらの色の家　百(ホ)千友　かのくらひをりとつまにひし
をもたせそ也　此河島　あくをなつりしきゆへ色の
てかくりや
あやにくそ　御使と不審のるまし
郡公家　源氏うとかりしたあなたは後はなとよめり
ともかくに　わさと又垂帚(キ)を帰(カヘラコ)てなり
うへし　遠孫　花散里庭乃梢も茂てあひてうへしりたに
孫をそらりたつの孫　惟光(コレミツ)もたとらいまる心よりへまし

人しれぬ心づから　巻乃初は此心のけの旨趣也
源氏を恨てあるへ別に無人なる事をいふも家中も
思ふへしと也此て道理をあまたにするもの也ともや
仍河説　新注也皆惟光か此中也　嗜説惟光の事也
かまさかるとは女の形見をもいふにや　引歌汁為り
はくしいれまゐらせて　大二代女　是も源氏のあひ給し人也
源氏乃巻にみえたる
中く　源乃心をのき給へるをこの色りての給ひと
ある分となり
廿日の月さし出る　五月雨はたたる庭のさ海おりひやる
也し

ありけるつまね　中川の君なるべし
かのみし里その　いふしへ乃とくかくらへる歌也
いつのたよりての　あさくもなく
橘花の香　古今也とあら給へ也　橘の花ちる里のよし
又山のひろまさかんつも　源氏方
いにしへの　女御へ　源氏詞也
こよなう　古事ぶなくさみのなしはもそふとる也
いもはう　かうり也て也　めかしからんと思へとも
おりふりゐての事おもひかるとや
人めなく　女御也
はしめへと　古院のおほえ花やかなるをもしのと

まほろしの人とも見え
つらさも忘れぬへし
かく数もなくして　源と花散里との中也　双紙
うれしともいなしと　音信なしとて恨てしたまふも理
と源氏思召なるへし
わりなかりつるかねも　中川の宿なり
訪ひ来すなり　双紙也
とふのくに　ただ
措ても常世へ形見をとる事　河海にくはし

次須磨　九
此巻弁に詞の巻名　源氏廿六才三月比より翌年
まての事あり　廿四歳の秋より廿六歳までの事を
発端とのゝするうこのるへしみやこを立つかれるに
と細流に筆方よ見ゆる也
世中いとわつらはしく　帝の御あつかひを定めける
まや　五国なとうかゝひ給ひんまくと我のしてこれ
めしまゐらせ下り給ふ人也
そのかみを　源氏須磨の浦に隠居の事にはよそへたるり平
中納言のかうふれし事　又周公旦の管蔡の讒あり
とりて東征せしこと従用としてきしまゐ　又菅丞相

西宮左大臣ハ太宰府(ダサイフニ)左遷(サセン)せられし事 野ね乙漫ば
へなりされし例ともてかぎりハ五之涅槃(ニハン)一途(イット)なり
又大臣殿 忠為史風光しも一身となりぬるまよとせる
あとし 呼
ひろけ 叩人志けし 囂(カマビスシキ)心気
水のひろけさるとふをさひろぬて廣(ヒロキ)心也
治 尚書 天まりひとるとよ見ら
姫君 紫上也
あふさのきら 親忘ハ行楽もしむさくもなしあふ
そのままつまやむのふけりそ
かなてふもややや めり親ハ行のひちとぞ思ふし今を限
乃りて多るなり 源氏ハ所卅の別れもやとれ
もひ行人ろ
入道乃宮 藤壺(フヂツボ)あくまり入道宮とやし也男女よ逢し
てなるとい人ろ
やうひ廿日 西宮左大臣 安和二年三月廿六日左遷(サセン)
太宰府(ダサイフニ)云々
それぞれの心ち 花揖 よし双紙也
よみりくれ 秋也 来詞よ表云々
あんたる車 内くれ車よやゆかまとりり棄車(クルマ)なり
夕の気色 夕霧也
つれくれあもらせ 左大臣詞

あしわくて　蟄居せる人のかへ出ありくもくるしき事のかる

とりへて　蟄居と云は冬こもりて虫の穴に籠て居るをいふ也

いちもやう　子建　無言兎也

いれちなのき　壱若多巓

あえのしもと　あるましき事也　呼

日本紀　神功皇后三韓征　海河新羅王拙訂不東日

西より出阿礼那礼河のさかさまに海の子のみれは乃不れの

アマ星となしてに天王をみつき擲退悦せしと云や

韓一字国也　新羅　ちくさい　かくらいあまされ

川　あらきの国の名也

とある　源氏詞あま

ゆしてくわんゆく　官爵除名とて　出あふりあめのの

た官位の除名して世法の人よ分をなり　されあひとく

云文のなくとしや末りとへく　除名して流罪のするれ

あり源氏をた近之例也

あさまりなり　除名はかりの人と云也

うれしさ海まく　よの法のさ海なるもし

むすり乃持りくる　左大詞

皇の分　若上事也　同詞

ともあるにてしも　左大詞　源氏をたすけてなり

聖廟などの事とゆくめりとうしあまとのとうりや

人のことみも　左近例多之

あれと讒言成也　云出もきかぬに自落居とつくり
つくりえに　いはんとすれといはゝ遠ぬと云心なり
おもひのしもあり　つくりえにいはゝ孫を胸に似たる
のれて心のうちは歎けれ
ときうつなりぬへし　双紙也
太后のりうと　葵上　世にも出なと也
もりぬ山寺　葵上とまくかとまくるへき人の者也
わかれは別て
文選江文通別賦ニ云黯然銷魂者唯別而已　花
いかとなくおと　宰相の詞
さまさき女房　源詞　宮へ参る也なり
きれうのこと　一本　鬼神とあり
仁王を持て　虎狼也こそへなり
うれ人乃方　面白き方なるへし　源乃方よりみの也
たちを　移く都をへたてゝなり
敵にも　二条院の事
さみしひかん　殿上也　臺盤所よりある
後もおもて中に臺盤所へし
ましてつゐに思ゆりん　後成の詞にて
思ひくろ秋の庭よりきなれましてはすゝ香の夕暮
よつし　源葵上への詞也
ひとやことより　泪なしやる方ひろう切なし

かゝる世継　愚詞　次ノ人へ此語なり
父孫子ハ　祖母ソボのたてや父宮すん　堂上を諫めしつ
うさつましとそりや
人乃見るらん　愚心ハ父宮より無道をかやめいさくに
思召感へし中ゝ兵部卿ハ浮子とちかり恥ハヂなり
われハ人のよしくハ　母君　祖母也　源氏まて也まゝ母
乃愚上僚ニハンサウハイ章をと称との積る所へし
増くるとそしたる世まて　左遷サセンよりまさる事もやとなる
伊周公乃母ハあらんとて哀りし上しまゝらてなと
左遷エンルをる愚をとなくふかくの詞也
うちの宣　愚兵部卿也

むかし乃あそひ　率ノ猪璽也　或ハ縮シユク　淫服
散班サンハン　耆老シユクラウ此ひハあそひを書ハ是之今源氏を世あ人也
仍愚之也　河　殿上法札削ケヅリしゆへの
為ハかくて　源さするかるを字注りてさくしのう
まと云むるを　紛てとく済らぬと云む也
殿此うち　黎家没レイケイテンなり
いそちの中　ものなくん愚かの中ろりまほはのそ
世乃うちことの世こわらん
かうしも　女比をるを
ことなし　書るコトナヒ　日本紀
未作てみも帰る庭の庭をんあらぬ事なしのなまり生ける

夜ゐはしみて　夜なる也
送り九月　毎夜九月也入ることを力に思ひよそへ給へる
宗祇説　闇光西より照左注月も西へ行とも左注に
あかすとうしやとたるなるを
めあくうかみれそ　あひにあひて相思法を截絶子やせ
九月に入ぬなくかなる
月影　笛てもや　花なむ正字にて九女のとそのえ
御別とはしみをせとよくと給へる
引めくら　左注にくめるとも虚名なきえ噂となり
源氏手
ましかぬ　行なきとなくぬ涙のつれしきをとくめ
九まへりれはるなりけり
先まうて元萬里と
文集　白楽天詩賦　七十二巻　長慶集と云
長慶年中に集故也
西のたい　院内府万事堂上り給任運なり
まゐりし　らうしやをよむ也　次庄に牧也
庄のうちに法牧をあかり給へりや
けん　券　賣券と云也
日のたりの中務　二条院源氏の召使給ふ所なりや
つれまた消えてなし　清上海給つあんもいかとするを
源つれなきを恨ならなけるなし

こゑ〳〵　紫上なり

あふせるにも　朧(ヲホロ)月夜のかたへいへるにや　更衣のやうなり

まろは河内守を用也　みなとを是非にて殿しのぶ人は

名代ふかき(フカキ)をいへり　これもやなりしもやく人はなし

てらよ池なるにも也　俊成卿女も此歌を一と云侍る(ツタヘ)を

つくれのれ　是この因果(インクワ)すくわうあはらめ逢若(カタミノカレ)道也

浚河にも　内海のこと　水深(アサ)也　なのめなく彼のかはふせも

まとをして清ゆのんとなりや

うしとれおしかをゆるを　更衣かとのすなる候へし

なりぬ　双紙也

かひとそれ　如此書ても海さ槿ごの事あり

小山　岩宿に　夫露濃(ノミコキ)岩のきと云所あり

松濤(ガサキ)乃奥(ヲク)乃名所也

暁のきて　両白詞也　定家此詞をとりて

春をさく霞のの山乃をに暁のけて月出るころ

先入道に　よひ乃あり　萩壺へまる

一如　冷泉をとまうけ給ふ事なり

清山より　院の浅なるあり

みしハなくにも　入道乃清にも　あるをなくるにをおもふ

世の中に若の川連乃日まてし歎のん　小町

えうかくお　双紙　無類逸(シウイツ)とある

かのかしにも　源院に別しなり

月待出て　暁のけての首尾ころや
ゆふなる　おりひ海うをよる事ありしとなり
兎角皇子ある同じ事なへし
右近の尉は蔵人中将紀伊守か弟　伊予守の子也
可咲冠又　除爵殿上ゆるされ乃日給をもとられたるなり
ひきつれてと云　右を
海のつらや　賽宮注　祈願を報ずるとよめり
棹見　日本紀　ひと海やりゐる
うき世紙を乗り　源
かきりありても　十善帝王乃身まくを生さとの仰てゝを
其曲とるまて

ゆきかくハ　古墓何世人　不識姓與名　化作路傍土
年々春草生　楽天
うくろのむさき　おもとなり
あれ知や云　おめり月の宮のくれまると　源氏
右院いめて　ゆ廷あ後入の文へ密通乃事とし月乃ころ
おもたれとむの鬼なり　おりひぬ人を
王命婦と時のつるにとて　大道文は法かのあうり本文
ぬり涙ぬ人を
又さりつを侍らを　おそめひゐのしなり
いほの又云　源　本文は業光の春にとりまて
ちりすま　苔透也

あちきなき　入道と源との中にて王命の心をいへり

さるのやうに思へて

浦の庵りもところからよし王命の道をなり

住まへすゝ　後へも帰りしらさる事を

うこそなりとく　王命の心なるへし

されてとくの身　開落（カイラク）を源氏栄辱（エイジヨク）や今南の花と云植の

花のうきさきとも始春を必（ス）法　改京なるへしとうや詩に

時あらは也明年　いろく花をう春も過しうりしぬとしみ

花へし　花をうすかは生も不あれを咲てとく哉

花なりひり給し

時しあるて　引哥　不妄来勘

ねさめ　八雲の下女と書給へてよ

みのうやうと　と紙すむやもなく漏らもなくよむへし

紀算　後騎（ラクハセ）は扇長（カハヤヲサメ）女院女とてありし事也

もいやしよ　義理（キリ）なる也

世ゆする　勤字

それほそ　発足（ホツソク）まくそなし先如此書出をり

源氏ハ皆此筆法　月出るりそりうきほや

逢つれ　次戸へ乃なり

おほしへる　源氏物なしこと紫上へみつくみをとし

となく所めたきなり

いとくし　以とくや　しるやをめ小や

いけるせん云ゝ 明也 ともれしはとやさと大かたゝ
花作かをり
おもしろきぬ云 叢上的也 万年もいきぬ物なれと悲向
面白云ゝ
されの時 淀より舟にても一日なんは浦へ下といふ
但筆ま一なりや
大江殿 鈞宍淀京の時の擒館也されに松はりけると
云ゝ 清代一度の事に迷はりや 大和従より摂津に
うつと難波すと號ありて十日めに入京と云ゝ
高き驛樓あり
うし国より云 屈原のうすと持もあり
醒酒れむなり 源を比してや 屈原字ハ 正平と云
楚懐王仕三閭大夫と云官也 讒言にかて 湘南と云所に
放されけり釣する翁いりてのし家に来ると向されを
告云 人皆酔我独醒 世皆濁我独清 云ゝ 下略
うら山しき いとゝしきゆとりうしろの波しきにうら山
しくものゝ色ろ波のれ
三千里外随行李十九年ノ間 偏転蓬 蘇武のことを
左遷賤 須磨へ十里あまりの行程をもいふ也 とや
かひの雲色 あの夕暮くるあを天川 とやさる舟けの
いの京の 乘人 引か渡むもあさ
京へと奇 源の光む也 霞の色々も杖らもむを鋪満

とりや
つくろハぬ物なく　面白詞也　指ざしまくハ万物の名
のかゑし
たちよりて人哥のかり　舟ともめのかそのかみるを
りしか　わくらハにとふ人あらハすまのうらにもしほ
たれつゝわふとこたへよ
かやうにても　此哥よりわくらハと云詞の世にはやりてま
しとなり
かうかなるをを　無罪（ツミ）配所（ハイショ）ノ月ヲ見んやと云心也
うへ本望も　本詞より春秋の花の事あるを
ふかうしく　古河まりて文とりや
ゆうの毛　夕霧
のうみもやうに　涙（ナミダ）也　ひとさへれ人の袖を掲りくるによ
のせも堂上を云をあまる也し
松嶋の　中宮を入道の宮かれてあまれと海やと云を
ひをぬれ也
みをくしまさかりて　あらふれ涙おちるひしほの汁まささ
て思へらなり　愛之　汁と見ゆると也
申るゆへり　中納言の文の中にかなり
つれくつる　文言（ノコトハ）なりてし
ころもも海乃袖　源氏のころもゆかしさとや
塩をも海よりしてかや　白波乃立ちもくともこ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

浦にしほくむ　まして朧れ思のかゝるうらさまとなり
源のにころもすゝとあまたゝくゆるとよめり私云此
哥なれを源をあまにたとへまして朧の方にしほの哥
あまさへも侘しむ思ひ出まはまして明世上れあ海
みして可然也　ころもを海のうらのみるめもゆかしき
と塩やく煙やいかゞみるらん　悲哥也
海人乃哥　芸上よるの衣とよめるを乃心まんとの井物
おと紙下にはふよきをあり
をのく文句志侍へるしかるに衣裳（イシヤウ）　文義也
やらて侍はうしまく　聖廟（セイベウ）宰府（サイフ）に下向之後不断（フダン）に精
誠（ミン）にし涓夕法花経に轉讀（テンドク）ましはけるとあるにも
中くあの人乃観の心ハ寓にあしし拂也もそと思ふに道
かまとひぬるかれ此行方すゑハのそわるとなり
わかしそろり　あまの書侍と也　双地
打うけく　文言（コトハ）也
あまぬ夜乃　夢となり
飛みりきる　すし蒔（ヨロツ）つこ蝿うら気と也　涙代に一度まれこと
源え無難の色に行ほとりてもいけとももろまにとのみ心
なる色し
うれめつる哥　消息　心明なり
伊勢鴻や哥　又同様也なりとよめるに源氏を空で海
路し行ふりもあえしと云ある也なる色し

あされ　求食　貝をもたせて見

あはれに　源氏の中に一みしを炎上よりのるまかり

のふいこととのも　双地

かく世流　文詞　伊勢へ下らん猶をとなり

いせ人乃言　伊勢人をあやしき猶をおそといへるをと舟

に棄て彼れ上あく　風俗　伊勢人　此此言也

あはのつむ言　同二首源氏をぬなり

あまにさり言　此言花散里氏中みしる也　其海れこ

とさも　いとしましても使たりの御をさ〳〵むまそてあめ

里まちの姫君花に源氏の方をまよれ　こゝろ人さる也

むかし　今はいかなる人に御ものさし　之　濃て

門さをりてへ

りんの表　出仕　停止ところ也

えかも　こゝのてんまふ也

うのふくらまし　源氏践罷されてあそんなれども

むしみけし　源へや

いみしかりし　朱とのんれ表との中なり

清さ海かちち　御門まふ也

ひれうらら　勝の也中

それ人乃　源なるまし

院のれ別し乃始をせし　前遣りあるは遺言なり

元務しし　内侍をまふ也

あちきなき　佐とかゝらんと思召すや
ちうなけんの　次應へ乃於也
いける世よ　拾遺　忘らすん後ハ何をかいきる力のためこ
うんそみまくおしかれ　後世をとらう契へかれとや
おろくと　臆れ渓源を忘むしてと恨給ふ人を
いまって　朱いまた浄子なし
東宮と院の　朱れ法親子なれと御紀しなり
ようしぬ　八宮をとりたてんなと思召れ下りもよ
おほし給ふ人かとに門の事も不叶とや
海をとあし　また海つらを陸へと云文字ありや
りやれ中納言　諸人乃徒すくしも威なりを閑吹こ
ゆるしけの浦の世　此うちまく可弦元　世用乃忠見の
弁とをらしらるて謡也行年のをとらてなうらめ
思ひ此みて可弦元
まくろをろうてて　白楽天　遷客ち鏡款抱聴
海くらうく　独ゆの宋うたまろなみてらうんその抱
もうきこめんらなり
こひわひてなる　都乃ちくと思ふ琴乃ねよ都れのこる
風なりとなるを　ゆう子ねりひやをころあくろの
落居大事の詞なるなし　独すしかけゆうか語
ゆめの夜もみしとふかくまうちおふ浦乃波　定家卿
かいあうれ気升浪く　あちきなくなる

ちゑつねのり　千枝常則両人絵書也

つくり絵　源氏の墨絵を綵色と云歟不用両人ゟ

を物せさせやとなり

心ろこきあやれ　垂文まくを見を惑　花園　あはれやられ

れやちかのあれせとりよゑし

釈迦牟尼仏弟子　金剛仏子某と云あらくのむなり

ちいさきゐる　雁鴻易渡秋風上鳥舟不与夕陽中和漢にも同

つらなるよる術なり

初かりは　侍人ありあらぬ捐りし初雁乃けさ鳴くを

乃めけらしよのれ　心叶乃　うきれや乱るなかるへし

うれしきを害てたすひを催のしとけり

くえつく将あ　心のた也

民部大輔　惟光

むかしあ　世用乃為の行ゐると思ひしの今自ら事や

指をせりてをふ行事あるとそしや

とせいてくあ源氏をとられもうひ棄れまて厭むとする

友まとりしてをいかく　遠おる友まとりしてむかし也

おやのひ有丁残て　太近のせうの丈乃事紀伊守の弟

月此のかのを　月影似鏡寒朝風気如刀不伐愁　雨廟後集

二千里外故人心　楽天禁中獨直對月寄元稹

三五夜中新月色　二千里外故人心　古人の心甚し

やま出ろ心見新月の文今禁中にてみるを前くこえ

さうさくハなしと　白楽池をつくりて今源氏さ
る殿上ハ月の白きをうけんと也　北西白むより禁中
を賞しそむるを殊勝く
霧やへ行ける　排雲ヨ　九重の霧やへたつるの事也
ますなる色し
夜ふ高殿あり　源月をと見給ふ城入給へといふかりある
を摘おりひへたてゝるをなくゆめまつるや　嘩
見るかゝそ事　源郡もと月定ふよそてよめるなり
それ枝うくれ　排雲かあり
れんしのきよのつゝ　去年今夜侍清凉　秋思詩篇独断
腸　恩賜御衣今在此　捧持毎日拝餘香

去年御衣を拝参る事を摘録まん乃せをと筆方ふ
やさしうちとなり
うしとのミ一篇まとまもちひと也　御衣をと引に
そんてはつめしく恋しきむもあるへし
それは　又節の文也　大宰帥
小方ハ舟まく　抛別を陸地なり
又兄を　源のあひし人也　花散里にあり
うち　帥は闕之時ハ大弐帥の事とをそところふゆくへり
惣のいへ里
まてるむのひ　京よりまうして奉迎するなり
子はちくせん　大弐子　又節の兄也

申しをおりひて　大貳も子の筑前守を都へ申しを思て
其乃まくらにも源氏へ申し不参此是君臣の道を思儀也
凡此巻ニ　君臣乃道朋友の交なとみえたるは源氏謫居の
身なれとも恩賜の衣を携て君主を忘れ給ハす三位中将
乃朋友に信ありて此歴の来給ふ人をされは又物乃哀しきを
知て慰さめ給ふ人なれハ君臣の恩ある不常を偽りなるへしと云々
へつりや
まのくちる　いたくしてむ也　狂して也
あとの事は云又節　波ひろの不浮なるを
人のとかめる　古今　いそ枕を人のとかめそ大和のあれはゆかの
れゆきに猶そふころ

いとゝつのしきをも　うきてゝきみつむなりゐし
むありての事　源むあつまてそ文章のむを云也云々
いさりをんとこそ　古今　篁　思ひきやひなの別におと
ろへてあまの縄たきいさりせんとこそ
ゐるへの袖さおくし　句読也　此儀を用　又説　は号
日中紀　菅丞相　筑紫へ下給ふ時明石のえき驛長いみし
くおもへる氣しきを御覧して作給へる
驛長莫驚時変改　一栄一落是春秋
まして　人くれは猶云へと覚しけれとすかとてえ節いまし
て源氏の消息にたちとまりても恋慕思へるとのや
きこいの文　通居

たやけ乃のうしなゝん　勘事　のんたうおとの事也
あうきひ　待おおとの事なるへし
まのきのそるると
史記曰　趙高欲為乱恐群臣不聴乃先設験持鹿献於二世曰馬也　二世笑曰丞相誤耶謂鹿為馬問左右或黙或言馬以阿順趙高或言鹿高因陰中諸言鹿者以法
暇敗也　秦始皇中絶　趙高かり源をけして乱をとさんとするに群臣を馬を吹してるとうひしあとくにとうそるて鹿乃ゆゑとまふ討也
ゐんのしれない　二条院のなり
うらしけなくそ　上臈そ下人りもちのまうそとまをうう
乗事ともおもしろきなるへし
山かつのおや　源　こふる男人を都ノ人にいふ也
ちえくへしきまなり
たゆふ　帷之
むかし胡の國へ　王昭君の事なるへし
わかれひ　哀ふ上
胡の後の哀と　王昭君
胡角一声霜後夢漢宮万里月前腸　胡綴以
さしあまるゆく
天廻玄覧雲將霽　唯是西行不左遷　西へ行とは月を西へ行て東へ不行左を東へふ行左は京へ帰る也

いはゝ此方　月を空に嫁られても清井はん不濁源八
いのことなり　恥とも
友ゝゐ方　源も旅人ゝ友すふ事しもやゝゐ此りしきと
ものや　三ヶ所源や
家は　次ゟの明石の家ゟりゐと
明石浦を　推ちゐさむるや　夷姫　日本紀　葛谷とも
同むの
うの入ゟ　鞍馬よく乃物種なり
身刈しいさうて　苦痛
かと此ゆゐものゝ　国守
あゝの　吾子ゟ宿世今道也や
清めらん　みめとよむといへとも不用　河海之
異本り清りし　思ひとくふや夏乃清意ありしゐる
なる也し
王臨の中も見の清門にも　漢家本朝　清例多聖相ひ
王綱に菅家西宮左府内大臣　伊周以下抜群賢才皆罪
見配所之月　不及左るる先
いりふ物し給ふ末を　尼君乃崖をみなとろめゐる
詞也　末をとる　尼ひとや
もしもやと思ひを　相並之家と入道とをいとこたるへし
大臣此弟也　女の幸めゝ例とりける
ゆうあく　り迹也

あはれありし海をくらかりしよ　明石上の心也
筝の琴にて　源氏　廿六才
ちらはう人乃　夜壺
いはとなく家　源也　百敷の大宮人やいと海あまりや
撥りさしてなふもくらしつ
ほとはなみさ　後撰　うれしさも昔を心や一ツありて
わのまぬ摘を波ある也けり
竹ばめぐりの　又架三間新草堂　石階松柱竹編牆
楽天　香炉峰下新卜草堂　大江の時也
ゆるしたれ黄ばらるかふきふひ乃めりきまはしゆゑ
ゆるしまを薄紅也　黄のちるかをさなる文のめとふ

よはるとのへり　きぬの名事なるうへしまぼびとふ
花田ありまうのましまろをぶ云かりきぬさしゆゑの事
なるなし　源氏乃姿也　花ニ委シ
たんさ　弾碁　碁たんれやうなるとと也　河ニ委シ
めつけ摘　貝おほひをする摘也　海津摘と云く
よしめりきふう貝おほひの
心たりけり　世中へとてもめぐりても同事　文も萬也も
たくしおりれと
いはやもおいて　様子との心の　河右事不用
わもの井　あすのねうりなとうそすへしうきもうし
みをひもさむしみまくさもうし　催馬楽　和州

玉

京二条万里小路也　ましてさもなるをしはかるへし
なよりみゆへりや
はえもせぬを　双
さりとて無大事也とて　ひ儀を不思ぬや
忘られし　と　醉悲灑涙春盃裏　吟苦支頤暁燭前
與元九峡中ニ於逢時三月晦日夷陵と云所ニ留て元微之ニ別時
詩也　時ニ相看をなり　定家つもこの句をもつて
を詠ともにめくりあひけり旅枕涙にそゝく春の盃
古聖云　源
わのなく子云　三位中将の方ハ秋の露乃やうにこゝ只
此時の後ほとのまとよ路人へまいる事を露なり

都はつと　源へはかりをかくれさるまて
うしけるまてをりとて　左馬頭とくらふとて在塞
らおくまや　浜人乃をゆしたれともとなり
くるあ人　あくにまて宮肝りみゆる妹の家ゟ早くい
さんあゆめ黒駒　人丸
風ふけうしてを　胡馬嘶北風　越鳥巣南枝
古ハをとなりふむの　爲は南をとふろうりや
雲ちかく方　雲を天子や　是を三位中将をさしてかく
あへし　逆濁ハちりまさそりとかくて
くりすさまより　ちや路人へとなり
うたをまれなりし　聖廟よとも依字なりとし也

たけのうれ㕝　無侫とうや　鵝(メツ)くりよをてなり
いとしを　せよとていやしき人になりらん
志のすゝひてうミねを忌ゟ紀
やよひの一日　世風記ニ曰ク三月上巳(ジ)桃花ノ水ノ下之時飲(ニヲン)食ヲ
為ニ脯招魂続魄ヲ拂除不祥ヲ
三月上巳日　文人并ニ禊(ケイ)飲(イン)ス於東流ノ水ノ上ニ
ぜんじやう　せだゞやうとも　軟障　幕(バク)のやう成物よ
高松など絵(ヱ)に書て壁(カベ)にそへてたれたるなり
あの國ゟのよひきる　道海法師也
谷位播广國　昔ゟ其國くらりある為也
志くさうしに　人形(ヒトカタ)を一つのせて流してや

さればこれに　萬むさ代ひ也　されくしき所ところや
けを達と云ゟろの
やをよろづ神　八百万神　諸神乃心也　旧事(ク)本紀曰
高皇産霊尊(タカミムスビノミコト)召ニ八百万神ヲ於天ノ八湍(ヤス)河(ノ)之川原ニ
みそぎして思事とそ祈らやと萬代の神乃まつりく
中宮難波(ナニハ)のりうくへに大伴黒主奉り　とひ見るやあけ
れまへくさくなどの世るつミぞありやなしやと
祇人也　後詞に時そまそ人とよむ　盗人(マスヒト)
乃海ふ不係よ　飛ぎさうしその紗ふり感(カエ)じて返象(ノサウ)起
どみをとる
ひちうきあそ　係(ニカハ)なる為也

ふかき海をいのるらん　波乃白きを云

定家卿　明月記云　海脚鶏鳴電雷張帆

弟よ浪さてもよおりまてくるとあるを

河のしほかと云　荒かりつる　古塩　しんてんをなり

れいきこなりつるけふへくをうえなくうれうりけり

此ふ海の中に　彦火々出見尊　兄此判のそくろきの寄

此釣をかりて魚にとられくるしすゝおひし時塩土老翁

といへるものをしへくの術をして彦火々出見尊を

海中へおくへ入まいて豊玉姫にあひせまて潮干珠潮満珠

をえて海路にかへりなとせられにけり

龍神宮殿にめてくゆきてかくやうに豊玉姫をあいそせてわき給

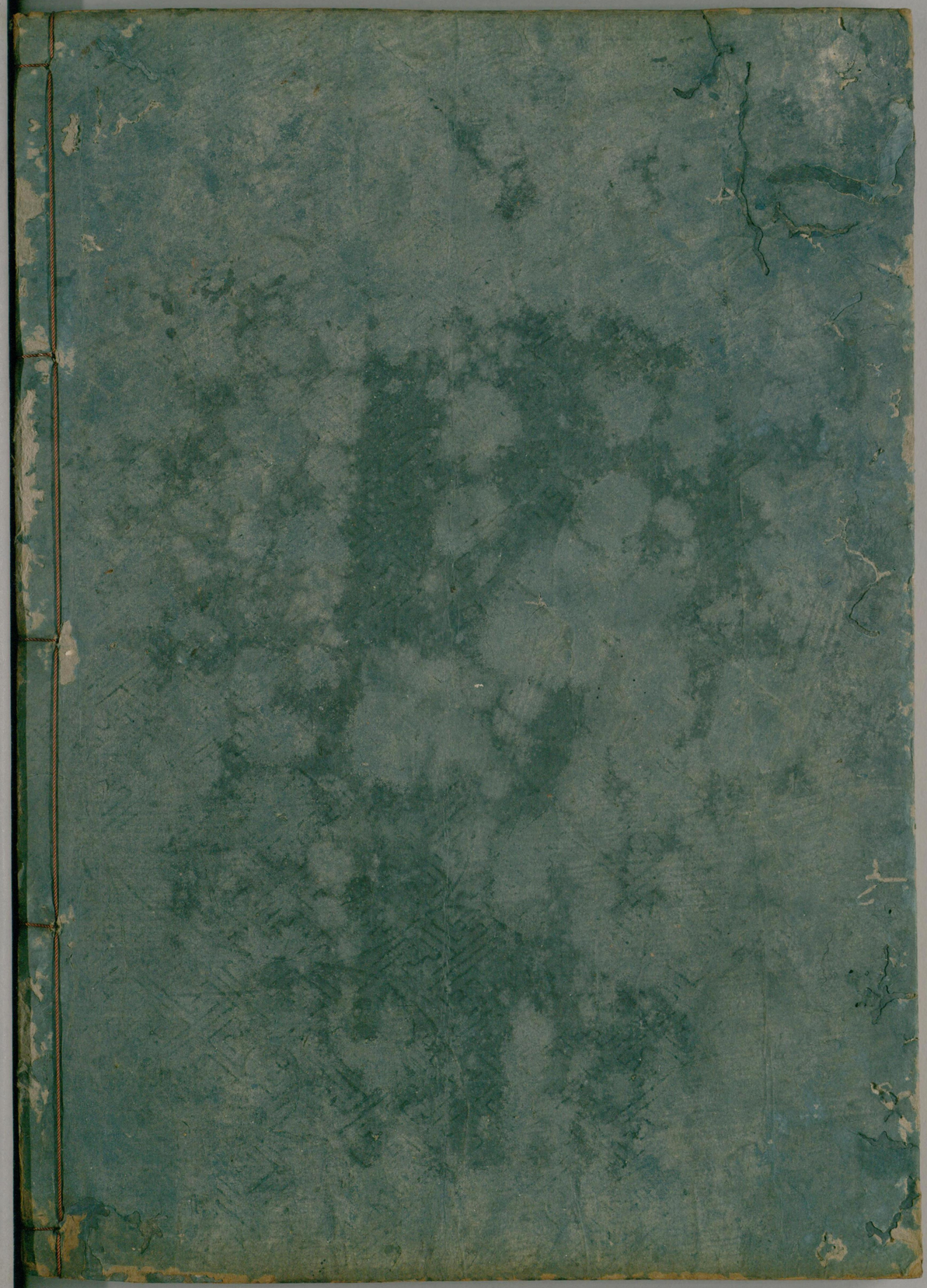
ときり三とせとくめされにけしてなり

これすゑ竹たへのことも　明石をと書出さん用なり

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用